助だけでは無意味と無視されたらしい。「カネは出すけど、ヒトは出さない」という従来からの方針が完全に否定された。

拠出金に対して批判的であった有識者やマスコミは‘それみたことか’と海部内閣を批判しだした。

確かに苦心惨憺増税までして工面した拠出金が‘零’査定では海部内閣としては立つ瀬がないと嘆くことになったが、よく考えてみえば拠出金はアメリカ政府に差し出したモノで、クウェート政府に差し出したモノではない。しかもクウェート政府としては直接援助してもらった覚えはないから、感謝しなければならない理由は全くないと判断していたのだろう。

一方、我が国ではうがった見方だが、三木内閣の外務大臣だった大平正芳氏がクウェート国外務大臣の表敬訪問を受けたことがある。

その会談の最中に居眠りをしたり、時計をチラチラと視たりと大変失礼な振る舞いの数々に怒り心頭に達した大臣は会談途中、席を立って帰ってしまった事件があった。

この事件はニューヨークタイムスのベタ記事にもあった位だから大分リークしたらしい。クウェート政府は王族が政権を握っているのだから、外務大臣も王族の一人で、終身外務大臣の要職にあるらしい。従って同一人物が外務大臣として感謝公告に携わっているから日本に対する報復ではないかとまことしやかに囁かれた。

大平外務大臣の名誉のためにも述べるが、アラブ系特に砂漠の遊牧民ベドウイン族の末裔となればまさに獲物に襲いかかろうとしている鷹のような眼光鋭い眼差し、眼が大きくパッチリしているが、モンゴル系は眼が細い、特に大平氏は細眼の人で、眠っているように見えたのかも知れない。

またアラブ人は大声でまくし立てるように喋るが、大平氏は寡黙な人、喋っても小さな声でモソモソと喋るが、アラブ人は快活、大袈裟が信条、従って日本人の挙動は誤解を受け易いので大平外務大臣も誤解されたようだ。

ともかく我が国の多国籍軍への拠出金 10 億ドル 2 回、紛争周辺国への経済援助 20 億ドル、開戦時に 90 億ドル追加と総額 130 億ドル、さらに為替相場の変動による目減り分補充として 5 億ドル追加（総額 1 兆数千億円）が支払われ、さらにクルド難民支援として 5 億ドル（約 700 億円）が支払われたが、1993 年 4 月 19 日の参議院決算委員会で外務省北米局長の答弁によると拠出金の大半である 1 兆 790 億円がアメリカ政府に渡り、クウェートには僅か 6 億 3000 万円のみ、クルド難民救済費用も 700 億円のうち 697 億円はアメリカ政府に渡ったと答弁した。

更には資金援助だけで他は何もしなかった我が国に対して風当たりは強く非難が集中したのだから海部内閣は対策に苦慮した。

八方塞がりで苦悩著しい海部内閣にアメリカからペルシャ湾内の機雷掃海作業をやらないかという誘いがやってきた。

実際に‘人’を派遣するペルシャ湾内の機雷掃海作業で、しかもわが海上自衛隊が持つ掃海技術は世界一の定評があり、これで世界からの非難も躱せると読んだ海